

## 文化進化のパターンとプロセス

氏名：中尾 央

所属：日本学術振興会特別研究員・京都大学

進化生物学，あるいは生物進化の研究と一口に言ってみても，実際に行われている研究の方法論，さらには対象さえも実に様々である．例えば「進化の過程で，どうしてそのような形質が獲得されてきたのか？」という選択圧（**selection pressure**）の考察もあれば，どの種とどの種が近縁であり，またどの種がどの種の祖先種であるのか，といった類縁関係（**relatedness**）を考察することもある．前者のような進化の要因とそれが引き起こす変化についての考察は，主に集団遺伝学や進化生態学などで行われ，進化の**プロセス**の研究と呼ばれる．また，後者のようなプロセスの結果として生じた関係の考察は，系統学や生物地理学などで行われ，**パターン**の研究と呼ばれている（e.g., Eldredge & Cracraft 1980; Sober 1988）．

文化進化の研究においては，ミーム論ばかり，二重継承説ばかり，これまでプロセスの研究が大半を占めていた．すなわち，文化進化の要因とそれによる変化として，ミームの競争や模倣のバイアスなどを想定して，文化進化を考察するというものである．他方，近年（特に 2000 年以降）では文化進化のパターン研究も盛んに行われるようになってきている．その代表格が，文化系統学（あるいは進化考古学）と呼ばれる研究プログラムであろう．そこでは，様々な対象（発掘物，習慣，言語など）について，生物系統学で発展させられてきた方法論を用いながら，文化の類縁関係が推定されてきている（e.g., O'Brien & Lyman 2003; Mace et al. 2005; Lipo et al. 2005）．

以上のような文化進化研究について，様々な角度から哲学的に考察することが可能だが，本発表では，人文学・社会科学と生物学の関係という一点に対象を絞る．文化進化研究では，人文学・社会科学（歴史学，人類学，考古学，言語学など）の中に進化生物学（特に系統学や集団遺伝学，生態学などで）で用いられてきた方法論が輸入される形を取っている．このような文化進化研究においては，人文学・社会科学の「生物学化」が起きているのだろうか．さらに言うと，人文学・社会科学の生物学による基礎づけが行われているのか．本発表では，このような問いを念頭に置きながら，文化進化研究を題材として人文学・社会科学と生物学の関係について考察を行う．

### 参考文献

- Eldredge, N. and Cracraft, J. 1980. *Phylogenetic patterns and the evolutionary process: Method and theory in comparative biology*. New York: Columbia University Press. 『系統発生パターンと進化プロセス』、篠原明彦他訳，蒼樹書房．

- Lipo, C. P., O'Brien, M. J., Collard, M., and Shennan, S. Eds. 2005. *Mapping our ancestors: Phylogenetic approaches in anthropology and prehistory*. Edison, NJ: Transaction Publishers, New Brunswick.
- Mace, R., Holden, C. J., and Shennan, S. Eds. 2005. *The evolution of cultural diversity: A phylogenetic approach*. Walnut Creek, CA: Left Coast Press.
- O'Brine, M. J. and Lyman, R. L. 2003. *Cladistics and archaeology*. Salt Lake City, Utah: University of Utah Press.
- Sober, E. 1988. *Reconstructing the past: Parsimony, evolution, and inference*. Cambridge, MA: The MIT Press. 『過去を復元する—最節約原理, 進化論, 推論』, 三中信宏訳, 勁草書房, 2010.